

「被災地宮城県を訪問して感じたこと」

(匿名希望)

大学卒業後に、故郷の福島県に戻り、地元の金融機関で働いているが、今年の7月から縁あって宮城県仙台市に転勤することとなりました。

宮城県の被災地を訪れ、被災された方々の話を聞ける良い機会であると思い、また、沿岸地域の被災地が1年前と比べ、復興がどこまで進んでいるかを見聞きたく、今回のツアーに参加しました。

南三陸町の志津川地区は、15メートル以上の津波が襲い、数千人が暮らしていた街を根こそぎ流し去った所でした。震災前のこの港町の活気など想像もできないほどむなしい気持ちにさせられました。特に、地元の語り部の人に案内してもらい、生々しい体験談を聞き、改めてその想像を絶する巨大な津波であったことを思い知らされ絶句しました。

学校近くの老人ホームで足腰の悪い人たちを救助していた高校生に、まだ助けを求めている人がいるにも関わらず、自らの命を守るため断腸の思いでその救助を止めさせる指示をした先生や救助をしていた生徒達の無念や自責の念は今でも消えないことでしょう。

南三陸町は、震災から2年8か月経った今でも、海拔を高めるための底上げが行われておらず、復興という言葉が使えるようになるには、あと何年かかるか見当もつきません。こういった沿岸地域への復興支援は、まだスタートライン上にあるように感じました。

仙台市の南に位置する名取市でかまぼこを製造販売する佐々木さんご夫妻の講演では、金融機関で働く私にとって、非常に参考となるお話がたくさん聞くことができました。

いくら復興のための補助金があるとは言え、借入を増やすこととなる不安、さらには一度途絶えた販路を回復する難しさ、将来の事業計画に対する懸念等々再起への難しい決断が必要だったことを経営者の本音として語って下さった。

被災の大きかった地区と違い、仙台市内はプロ野球の楽天野球団が日本一になったこともあり、寧ろ震災前より活気にあふれている。仙台市内では、経済面でもバブルの様相さえ感じられることもあります。その一方で、仕事上、塩釜市の津波被害を受けた企業との取引がありますが、単なる融資取引だけではなく、事業計画への的確なアドバイスや販路拡大等様々な角度で復興の役に立っていきたくと改めて感じる事ができた大変有意義な復興応援ツアーでした。

校友会事務局の皆様、地元校友の皆様、全国各地から参加された校友の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。